

ドイツ世紀転換期のコミュニケーション空間と感覚の戸惑い

——ジンメル「感覚の社会学」注解——

● 池田光義

ジンメル「感覚の社会学」（以下、「感覚論」と略す）は、邦訳版で20頁にも満たない小論に過ぎない。それでもそれは、珠玉、白眉、秀逸などの賞詞を冠したくなるような、感覚に関する繊細で鋭敏な、そして先駆的な社会学的・哲学的エッセーである。本稿は、この「感覚論」をいくつかの視点から思想的・社会的に読み込む試みである。なお、「感覚論」には、雑誌掲載論考（1907年）と『社会学』収録論考（1908年）との二つのヴァージョンがある。両者の区別が必要な場合には、便宜的に、前者を「感覚論A」、後者を「感覚論B」と略記する。引用文直後の括弧内の数字はジンメル『社会学 社会化の諸形式についての研究（上・下）』（居安正訳、1994年、白水社）のページ数を示す。ただし、一部改訳してある。

〔1〕「感覚の社会学」の意義

ジンメルは『社会学』の第1章で、社会的相互作用の概念を社会学的分析の方法論的中軸に据えることでもたらされる利点の一つとして、旧来の社会学が閑却していた微視的領域・現象にも固有の社会領域・現象として照明を当てることができることを挙げている。それは単に、微視的領域・過程を社会学の一つの独自の対象域として認知したというだけではない。ジンメルによれば、この一見些細に見える無数の微視的過程も社会的現実を根底で担い実現している最も基本的な社会過程＝関係なのであり、仮にそれらの相互作用過程・関係が存在しなければ、巨視的な組織やシステムはバラバラに空中分解してしまうのである。したがって、微視的過程・関係の考察は、こうした最も基本的な社会過程＝関係の究明も意味している。さらにそれは、巨視的過程・関係の分析にも新たな課題とその解決の基礎を提供する——微視的過程・関係の反復・累乗が、歴史生成あるいは構造・再生産の点で、いかにして巨視的次元で社会運動や組織やシステムに自立化・結晶化・客観化・「実体化」していくか、というのがその課題である。ただし、立ち立った議論は差し控えるが、第一に、これが必ずしも単純に要素還元主義的な“方法論的個人主義”を意味するものでないし、第二に、これによってジンメル社会学が構造＝機能主義に對置される“意味の社会学”ないしは“主観性の社会学”の陣営に組み入れられるわけでもないことには、注意を喚起しておきたい。一部のジンメル研究や社会思想史・社会学史研究は断固として認容しないだろうが、ジンメルの社会学とその方法論の意義の一つは、それが、方法論的個人主義 vs 方法論的全体主義、構造＝機能主義的 sociology vs 主観性の社会学といった二項対立図式の枠組みを超えた地平で成立している点にあるのだ。なお、ジンメルは自己のミクローマクロ思考を古生物学、進化論、組織・細胞学などに見られる当時の自然科学の理論・方法の一般的趨勢と軌を一にするものと見なしていたことには言及しておこう。

テキスト考証の観点から興味を惹くのは、件の『社会学』第1章の箇所が「感覚論A」の導入部分を膨らませたものであり、「感覚論B」は「感覚論A」の本体部分に香水論や近親相姦論が付加されて成立したという事情である。これが何を意味しているかと言うと、「感覚論A」がそ

もそもマイクロ社会学の淵源をなすということである。ジンメルは「感覚論 A」を執筆する中で、社会的相互作用論の成果としての微視的社会学がもつ固有の方法論的・社会学史的意義を明晰に意識するようになったと推測される。

「感覚論」はまた、「相互に見つめ合う」といったような直接的で相互的な感覚的知覚過程・関係というものを、社会関係・過程の基礎関係・過程を形成するミクロの関係・過程のプロトタイプないしはそのさらなる基礎関係・過程として考察対象にしている点でも、ジンメル社会学一般の重要な基礎的分析と言えるだろう。さらにはそれは——本稿では立ち入ることができないが——現在の社会心理学やコミュニケーション論の一部につながるものがあり、その先駆的業績を含むものでもある。もう少し言えば、それは社会学と人類学・人間学あるいは生物学とを接合する界面でもあると、ジンメルは考えていたようだ。感覚の在り方は社会過程・関係の在り方を根本的に制約するものであり、仮にわれわれの感覚特性が現在のそれとは異質なものであったとしたら、社会過程・関係も現在のそれとは根本的に異なる相貌を呈することになるだろうというのである。「感覚論」の意図には、その意味で、わたしたちの社会的存在が前提にしている人間学的条件の考察、あるいは少なくとも、一般的に自明視されているこの前提の存在への批判的な自覚を促すことも含まれていると言える。

〔2〕 眼差しの交差

さて、感覚論の系譜で見た場合、ジンメル「感覚論」の意匠は、心的相互作用の概念を感覚の考察に導入し、感覚的知覚を、抽象空間における単に個人的・孤立的な認識過程としてではなく、<個人間の感覚的相互作用>として捉えている点にある。別言すれば、問主観的な感覚的相互作用という視点を強調することで、感覚的知覚を原基的なコミュニケーションの一種、あるいはコミュニケーション一般の基層、底流として理解する点に、ジンメルの「感覚論」の創意がある。その点で注目されるのが他ならぬ彼の眼差し論、相互凝視論である。

ジンメルによれば、「互いに見つめ合う」という行為は、心的相互作用の典型の中の典型、最も原初的、原基的なコミュニケーション形態であり、相互凝視論の意義もそこに由来する。ジンメルは、相互凝視の原基的特性をどの点に見出しているのか。第一に、それが最も直接的で純然たる相互作用である点だ。この直接性と関連して、ジンメルは第二に、その際立った過程性、機能性を挙げている。どのような相互作用もなんらかの客観的な内容や形式を持つが、「眼差しによって人々を目から目と織り込むこの非常な生気に満ちた相互作用は、いかなる客観的な形象物にも結晶化をみることはなく、それが人々の間に生み出す統一は直接出来事に留まり、はたらきに解消する」(下249)。「相互作用は、直接のはたらきが止むその瞬間に死滅する」(同)。三点目は、その相互的構造的である。「この関係の緊密さは、他者に向けられ他者を知覚する眼差しそのものが意味を帯びている、しかもまさに他者を見つめるその見つめ方によってある意味を表現しているという不思議な事実によって支えられている。他者を受容するその眼差しで自己自身を露呈させてしまう。主体が客体を認識しようとする同じ行為がここでは自己を客体に晒すのだ。目を通じては、同時に与えることなくして受け取ることができないのである。目は、他者に対して、他者のベールを剥こうとするまさにその心のベールを剥いでしまうのだ」(同)。社会的価値の交換過程を思い浮かべてみよう。交換者 A は、相手 B に価値 a を与えずに、B から価値 b を受け取ることにはできない。この関係は、B の側から見ても相手 A に価値 b を譲渡せずに A から価値 a を受領できないという関係と相互に対応し、かつ相互に前提し合っている。二つの関係は、同じ交換関係の二つの側面、つまり互いに互いの条件をなしている、ひとつの統一的な社会関係の

二つの契機に過ぎないのである。相互凝視では、この相互性の基本構造が、客観的形式も結晶物もなんら伴わず、機能的過程そのものに示され実現しているというのである。

相手の心を読もうとして見つめるその眼差しが、その見つめ方が、見つめられた相手に対して一定の意味を帯びてしまう、つまり自己の内面を表出させてしまう——。いかにもジンメルらしい繊細で鋭敏な観察であるが、この眼差し論は、彼の相互作用概念それ自体に照らして不徹底ではないだろうか。Aの見つめ方が相手BにとってAの自己暴露になる、何かを得るには何かを与えなければならないというだけならば相互性は弱く消極的である。Aは、Bの眼差しに射す表情を単に一方的に知覚するのではなく、Aに見つめられていることを意識することで示されるBの側の反応の仕方、反作用の様態を把握する。Bを見つめるAの視線模様にはBがAの内面を読み取るだけでなく、見つめられたBの眼差しに現れる反応を読み取ると同時に、その反応に反応してしまい、それがAについての内面解読のヒントをBに供することになる云々……。この視線の逆視線、視線作用への反作用という相互的な視線の錯綜、絡み合いに触れられていないのは、少しばかり物足りないものがあると言えば、望蜀になるだろうか。

さらに、ジンメル自身は、他の多くの箇所でも、社会的交換としての社会関係における与えることが持つ積極的で構造的な、いや時として微視権力的でさえある関係形成・維持機能について鮮やかに描出している。「……与えるということは、決して単に一方の者からの他の者への一方的な作用ではなく、まさしく社会学的な機能によって要求されるもの、すなわち相互作用に他ならないからである。他の者が受けとるかあるいは拒否するかによって、与えた者に極めてはっきりとした反作用をおよぼすのである」(下195)。行間から読み取りたいのは、与える側と受け取る側との間の関係が相互的であるとはいえ、そこにある種の非対称性が存在するという点である。与えるということは、与えられた側に一定の反応を強要する。与えられた側は、受け取るか受け取らないかの二者択一を迫られ、受け取らないのであれば、それもひとつの拒絶的反応、否定的反作用として機能してしまう。受け取れば受け取ったで、与えた者に対する反作用への心理的あるいは社会的義務、負債、束縛を背負い込む。これを眼差し論で読み替えてみればどうなるのか。見つめられて、反応しない、目を逸らす……これらも無関心の偽装、対応拒否、漏洩回避、自己防衛などといった——局面によっては否定的性質を帯びた行為として——ある種の反応、反作用と見なされてしまうことになるだろう。凝視されれば、意図のあるなしにかかわらず、またどのような程度、形式であれ一定の反応を強制されるのである。こうしたメカニズムが直接的なコミュニケーション関係の相互性に構造的契機として組み込まれているため、最初に視線を送る側は、自己露呈の危険に晒されると同時に、相手に対して何らかの反作用、相互関係を一方的に強制する、あるいは少なくとも相手の次の視線操作にコミュニケーション上の意味を強制的に付与する主導権を握ることになる。つまり、すでに感覚的知覚の相互作用の中に、ある種の権力関係が微視的で流動的で瞬間的なかたちで絶えず生成しているのである。

ところで、このジンメル眼差し論にサルトル流<眼差しの地獄>のテーマを読み込もうとするのは、的外れというものである。ジンメルは眼差しをむしろ人間の根源的な相互存在性を象徴するものとして了解しているのだ。ジンメルにとっては、視覚的他者認識も相互凝視において初めて十全に成立するのである。他者認知一般が相互認知を前提にするものであり、相互凝視における他者知覚はそのプロトタイプなのである。「人間は他者にとって、他者がこの人間を見つめればすでに完全に存在するというものではなく、この人間もまた他者を見つめるときにはじめて完全に存在するのである」(下250)。なお、ジンメル眼差し論では、第三の対象を共に見つめる、しかも一緒に見つめているという間主観的な意識を共有しながら見つめるという<共同注

視>は視野には入らず、相互に<向かい合う>という対面対峙関係での相互性しか問題にならない。

[3] 視覚と聴覚

「感覚（複数）の社会学」と銘打っていても、実際に俎上にのぼされるのは視覚、聴覚、嗅覚だけである。ジンメルがどのような理由から他の感覚を考察から外したのかは詳らかではない。いずれにせよ、叙述の流れの中で一つのアクセントをなすのが視覚と聴覚との対比的な特性把握である。その一つの視点は、対面認識においては、「われわれが知りたいのは、この人間はその存在からいつて何なのか、この人間の本質の変わらぬ実体は何なのかということと、この人間はいまどうであるのか、いま何を欲し、何を考え、何を言っているのかということである」（下254）が、目は前者、つまり相手の持続的な存在と本質を把握するのに対し、耳は後者、相手の刻々の流動的な在り方を把握するという点である。これと絡む第二の視点は、視覚情報は記憶には残りづらいが持続的に与えられているのに対し、聴覚情報は耳から須臾にして消えるが記憶には残りやすいというものである。第三の視点は、感覚における相互性契機への着目であり、第一第二の視点と交錯して、ジンメルに視覚と聴覚との間の著しい非対称性を気づかせている。視線は既に言及したように間主観的相互性の象徴であるが、これに対して耳は不動で受動的で実体的であること甚だしく、そして何よりも一方的に受け取るだけで与えることをしないとジンメルは言う。耳は口の働きと交互的に協働してはじめて相互関係を形成するというのだ。

さて、ジンメルは、視覚と聴覚はその特性の非対称性ゆえに個人間の感覚的コミュニケーションに関して元来は相互依存的、相互補完的に機能するのであり、そこには分業と協働の相互関係があると考える。彼にとって、対人知覚の二つの関心事、つまり相手の持続的本質の知覚と瞬間的状態の知覚とは、目と耳との相補的な協働によってしか実現されないことは明らかであるからだ。さらに彼は次のようにも言う。「他ならぬ顔が告白してしまう恐れのあることの多義性が顔を不可思議なものにしてしまう。それゆえ、ある人間から見たことをその人間から聞いたことによって解釈するのが一般的であって、その逆はきわめてまれである」（下252、傍点ジンメル）。しかしわれわれの関心を引くのは、産業化・都市化の進展につれて直接的な対面的人間関係・コミュニケーションが変化し、それによって直接的で相互的な感覚的対人知覚が変容を遂げ、これがまた人間関係・コミュニケーションに反作用してその変化を加速させるとジンメルが考えている点である。ジンメルはこの過程が展開される主要舞台を、当時、長足の発達を遂げ始めていた大都市の「公共交通機関」に見る。「19世紀にバス、鉄道、市電が形成される以前は、人々が互いに口をきくことなく数分から数時間も見つめ合うことができる、あるいは見つめ合わなくてはならないなどということはありませんでした。現代の交通により人間と人間との間のあらゆる感覚的関係の圧倒的部分が単なる視覚にゆだねられることがますます甚だしくなっていて、そのため社会的感情はまったく異なった前提のうえに立たざるを得ないのである」。この一節は、十九世紀から二十世紀への世紀転換期に、目と口と耳が協働する以前の直接的なコミュニケーションが公共交通機関における<沈黙のコミュニケーション>に変容することで、口と耳の働きは抑制され、聴覚に対する視覚の圧倒的優位が確立していき、そのことでまた直接的コミュニケーションの感覚作用上の前提が変容していく歴史的様相を、社会学的・感覚論的に記述した貴重な史料である。

相互補完的であった視覚と聴覚の働きが分離し、視覚が感覚的知覚の覇権を握る社会史的経緯を、ジンメルはまた、工場、学校、軍隊——すなわち身体や行為の近代的な規律化・規範化・様

式化を推進する三大文化装置・社会制度！——を事例にして描写する。「同じ工場内の労働者たち、同じ大講義室内の学生たち、同じ部隊の兵士たちは自分たちが何らかの形でひとつの統一をなしていると感じる。この統一が超感覚的契機に由来するとはいえ、それに本質的に作用する感覚が視覚であるということ、諸個人が共同化の過程において見ることはできても話すことができないということもこの統一の性格を規定しているのだ。この場合、その統一意識は、集合が同時に言葉による交流である場合よりもはるかに抽象的な性格を帯びる」(下256-7)。抽象的な労働者概念が形成されるうえでも、労働者間のコミュニケーション様式が視覚中心に変転し、視覚的人間関係が支配的になったことが大きいとジンメルは言うのだ。これに関連してジンメルが関心を寄せるのが視聴覚間における感覚特性の際立った対照性であり、耳が多様なもの、可変的なもの、個体的なもの、瞬間的なものを知覚するのに対し、目は同じもの、共通のもの、抽象的なものを知覚するという。これが何を意味しているかということ、ジンメルがそこに、近現代的な認識様式を批判的に分析するうえでの一つのヒントを探り当てていることである。すなわち、近現代社会における抽象的な普遍概念の蔓延や、多様性や可変性を切り捨ててひたすら共通性、一般性を追い求める平面的思考の跋扈が、理性的次元での地殻変動に起因するだけでなく、聴覚に対する視覚優位の拡大という感覚的知覚の次元での変転にも規定されている。この感覚的前提の変容は、直接的な対面コミュニケーションにおける根本的な変化、すなわち口や耳のはたらきを伴わない眼の専横の結果であり、またその前置き条件である。言い換えれば、現代における抽象的思考の淵源を探るには、間主観的なコミュニケーションの近現代の変容を分析しなければならないのである。してみれば、わたしたちとしては、聴覚の復権、聴覚と視覚との相互的協働にこそ、抽象的思考の跳梁に抗する一つの方策を求めべきだという結論を引き出したくなる。しかしまた、その一方で、現代の巨視的社会構造・制度に対応する微視的社会関係は極度の抽象化・機能化をその特性とせざるをえないが、これは聴覚を遮断した視覚優位という感覚的条件のもとでしか実現しないのだから、現代社会では抽象的な共通性思考は不可避であるかもしれないという甚だ不愉快な結論も強いられることになる。

最後に留意しておきたいのは、「感覚論」が、事実上、現代社会における人間存在の主要問題の一つである個人の<平準化と差異化の拮抗や葛藤>を感覚論レベルで展開している点である。それは、視線と耳・口の感覚機能の分離および視線機能の覇権が、平準化と差異化の契機の相互対立・相互補完という現代人の存立様式を決定するベクトルに深くかわり、その帰結でもあり原因でもあることを示唆しているのである。

【4】 コミュニケーション空間の変容と感覚の戸惑い

「感覚論」の魅力の一つに、世紀転換期の社会・コミュニケーション空間の変容に伴い感覚的認識行為・関係が経験した混乱、困惑、葛藤などを、直接的あるいは間接的に社会学的手法によって記述している点を挙げることができるだろう。先に引用した、公共交通機関の車内における<沈黙の社会空間>、<沈黙のコミュニケーション>の描写からは、当時の人々が抱いたある種の感覚の戸惑いが感じ取れる。大切なことは、この描写で暗示されている<沈黙の社会空間>の成立が、新たな社会空間である<日常的公共空間>、<日常的な公共的コミュニケーション空間>の誕生を示しているということである。これは、中間規模の伝統的集団・社会圏が分解し、一方においては抽象的で機能的な大規模集団・社会圏、他方においては私的で親密な小集団を出現するという、ジンメルも愛用の社会学の常套的な説明図式が間接的になぞる歴史過程をその背景にしたものである。ジンメル社会学においても、二極分解していく社会集団・社会圏の両方に関与

する諸個人が、その二極分解の狭間に相互的にコミュニケーションを形成することで、この日常的公共空間が成立していくことが含意されているのである。様々な不特定多数の乗客たちが密集・閉鎖空間において匿名的・無性格的存在として一時的な相互関係（＝心的相互作用）を結ばざるを得なくなる公共的コミュニケーション空間が日常化する中で、相互的な無関心を偽装し相互不干渉の契約を相互遵守するという行為規範・モラルが次第に定着していくが、上のジンメル描写は、その定着過程の初期段階における視線の困惑を示唆していると言えるのだ。

相互に沈黙を守るといふ振る舞いの様式は、ジンメルの場合、現代人の「慎み (Reserve)」（＝自他への距離化）の問題と深くかかわっている。＜社会圏の拡大と分化＞とく個人における多様な社会圏の交差＞の概念は、近現代的個人の成立を社会学的に説明するために、ジンメルがスペンサーとディルタイの思想を交差させることで制作した一般的図式である。約めて言えば、拡大・分化を遂げる多様な多数の社会圏へ個人が関与していくことが、個人における特定の全面的な社会的支配・桎梏からの自由化・自立化や特性面での差異化・多様化を傾向的に可能にするという考えである。この可能性はしかし、同時に、個人は自他に対して一面的・表層的・機能的にしか関わってはならず、絶えず一定の距離を置かなければならないという否定的・消極的スタンス、「慎み」「留保」「差し控え」を前提条件としている。沈黙のコミュニケーション、口と耳のはたらきを遮断した視覚優位の相互対面知覚は、公共的社会空間において遂行される「慎み」が示す最も日常的で直接的で原基本的な様式であり、様々な形式や次元で個人がかかわる他の社会的関係・過程の基盤をなすものとして、ジンメルに理解されているのである。個化は弧化を背面にし、これはまた沈黙と視覚寡占を感覚的前提としているというのである。「感覚論」はこの意味で、彼の社会学全般にとっても基礎的な考察を提供していると言える。

ところで、ジンメルの念頭を離れることのなかった現代的個人の存立・心理・意味問題に、現代的個化＝弧化がその内面的・情感的側面として孤独感や不安感を常に含意している、さらに現代的個化は生の意味や目標を見失わせ、ニヒリズムに陥る危険性を常に宿しているという事態がある。本来、視覚情報は聴覚情報で補完する必要があるのに、視線を交わすことができても話したり耳を傾けたりすることが稀であるという対面状況では、個人のこうした孤独感、不確定感、漂流感、方向喪失感を増幅することになるとジンメルは語る。これが何を意味するかというと、ニーチェなどにおいては事実上、知識人階層という限られた一部の特権的社会階層の精神的・思想的問題として論じられた意味問題が、ここでは現代人一般の日常的な感覚的問題、直接的コミュニケーションの問題として展開されているということである。現在のポップで日常的な感覚的ニヒリズムの問題をジンメルは鋭敏にもすでに嗅ぎ付けていたのである。

【5】 困惑する嗅覚

ジンメルは、嗅覚は視覚や聴覚に比べて社会学的意味、すなわち相互的性格が弱いと言うが、同時にそれを非常に社会的・歴史的問題性を帯びた感覚として描出している。ジンメルが捉える嗅覚の感覚特性には、(a)客観的な対象把握の機能側面より主観的な感情的反応の側面が強いということと、(b)近距離知覚に適合的であるということ、(c)抽象化が困難であるということなどがある。この特性が絡むことで、特定の歴史的社会空間において人種問題や階級問題が嗅覚問題として、あるいは嗅覚問題が人種問題や階級問題として登場することになるとジンメルは考えるのである。米国における黒人と上層の白人、ドイツにおけるユダヤ人とゲルマン人、労働者と知識人層を具体的事例に挙げながら、濃厚な感情的コミュニケーションが交わされ緊密な嗅覚的相互作用が展開される特定の居住地域や社会空間では、人種や階層・階級の社会的差異が集団固有の匂

いの差異として知覚され、しかもそれには不快感、嫌悪感といった強烈な感情的反応が伴い、これがまた社会的差異知覚を増幅することを——あくまでも知識人層の立場から——ジンメルは示そうとする。当時は、講壇社会主義化した上層や知識人層からすれば漸進的な社会改革を理想とする時代であり、上層一部においては社会倫理と社会貢献の関心の高まりをみせたが、結局、身体的な接触が嫌悪され忌避されるのはこの匂いの問題だと、ジンメルは分析する。理性がいくら平等を唱えても、差別主義者である鼻はそれを裏切る。「社会問題は倫理問題であるばかりでなく、鼻の問題でもあるのだ」(下489)。

階級問題、社会問題としての嗅覚問題の社会史的背景には何があるのだろうか。当時、公共空間、公共的コミュニケーション空間が生成しつつあったことはすでに触れた。その具体的な歴史的条件には、大量生産体制・大衆消費市場の成立、新中間層の台頭や労働者階級内の漸次的分化などを含む社会階層間の一定の流動化、限定的とはいえ参政権、社会保険、義務教育などの普及などが挙げられるだろう。この公共空間では、人々は階層性を脱色された「不特定の市民」としてコミュニケーションを交わすというのが表向きの基本原理である。しかしながら、その背後には、現在よりもはるかに厳格な階級格差、深刻な社会問題が控えていた。ジンメルは、それとは明示することなく、彼の社会学において複数の社会概念を提示しているが、ここで興味を引くのが次の社会概念である。「下層が上層から勝ち得た注目や尊重感が他ならぬ<社会>概念によって担われているのは、社会的距離のために下層が上層に対してその個人ではなく統一的な大衆としてしか現象しないこと、そしてまさにこの距離ゆえに、二つの階層がともに一つの<社会>を構成しているという以外にいかなる原理的な点においても結びつくことはないことによる」(上11)。下層が社会的勢力を増大・拡張することとそれに対して上層が反応することとの対抗・緊張関係の中で“一つの”社会が出現し、また社会的に意識されるようになったとジンメルは社会概念の成立を歴史的・経験的に説明しているのである。ここで、この意味での社会の誕生は現代福祉国家、「市民社会」の生成と深く連動することに留意すべきである。

社会問題としての匂いの問題は様々な歴史的・社会的環境の中で色々な形式、性格、程度をもって現れるが、ここでジンメルが叙述対象にしているのは、公共的コミュニケーションの生成過程における過渡的な嗅覚問題である。それ以前、各階層、各階級はそれぞれ固有の社会空間を形成・占有し、諸階層・諸階級が直接的に相互作用して構成する社会空間は非対称的な上下・支配従属関係に規定され緊張感に包まれていた。19世紀末になると、この構造が基本的に維持されつつも、あらたに各階層が「市民」という社会的ペルソナで覆面して相互にコミュニケーションを交わす場面、状況が生じた。「公共空間」の誕生である。さて、公共空間の表層において仮に視覚コミュニケーションの次元では辛うじて「自由平等な市民」が偽装できたとしても、嗅覚的コミュニケーションの次元、嗅覚的相互作用の関係ではその感覚特性ゆえに、背景に潜む階層格差、階級対立の問題が隠蔽されないばかりかむしろ赤裸々に露出してしてしまうのである。この嗅覚問題の過渡的性格は、急速な社会的上昇を遂げつつある下層階級＝「労働者階級」＝「大衆」に対して上層階級が抱懐せざるを得なかった不気味さ、恐怖、嫌悪、驚嘆などが複雑に絡み合った社会的・「階級的」感情が嗅覚的知覚作用と強く結合・連動したことに由来する。

最後に取り上げたいのは、ジンメルにとって、鼻の問題が社会問題だけでなく個人の存立・意味問題とも深くかかわっているという点である。ジンメルは、文化の洗練化の感覚的特徴として(a)感覚の鋭敏度は低下するが、快不快への感受性は強まることを挙げる。さらに、(b)「……感覚の遠隔作用は弱まるが近接作用は強まり、われわれは近視眼的になるだけでなくそもそも至近感覚的になるのだ。しかしこの近距離に対してはそれが短くなるだけ敏感にもなるのだ」(下259)

と指摘する。密集・近接コミュニケーションから成る公共的社会空間が日常の生活場面となる現代社会において、これは何を意味するのだろうか。第一に、近接距離での感覚の過剰反応や耐性欠如が個人圏域の孤化の拡大と輪郭の尖鋭化を必然的にするとジンメルは言う。感覚的に軟弱化した現代人は、濃密な感覚的相互作用の絡み合いの中で、自己防衛として感覚的に弧化、自閉を強いられるというのである。ジンメルが引き出すもう一つの結論は、感覚的快感を享受することよりも感覚的不快感に悩まされることのほうが常態となることである。いずれも帰結するのは、感覚的ニヒリズムの蔓延である。

この傾向は嗅覚で最も鮮明になるとジンメルは考える。嗅覚は、視聴覚に比べて至近距離の知覚に適合的である一方、客観的な認識機能よりも主観的な感情的反応機能が強いからである。感覚の洗練は、密集空間では、他の感覚よりも嗅覚においてより強烈な感覚的苦痛をもたらす。「現代の衛生・清潔志向はその原因でもあるが結果でもある」(下259)。感覚的ニヒリズムは嗅覚で最も深刻な様相を呈することになるとジンメルは言いたいのだ。さらに、嗅覚は相手の私秘を自己の内部に取り込み同化する。「誰かの〈雰囲気〉を嗅ぐということは、その者についての最も親密な知覚であり、その者はいわば空気のかたちでわれわれの感覚的な内奥にまで入り込んでくるのである。嗅覚印象一般に対する過敏さが高まれば、このことが選択と距離化をもたらし、それが現代の個人の社会学的な慎みにとっていわば感覚的な基礎の一つを形成するのである」(下260)。つまり、ある意味で現代的コミュニケーションに最も不適合な感覚が、まさにそうであるがゆえに現代的弧化、個化、私化の最も強力な、しかし否定性を帯びた感覚的媒介になるという逆説をジンメルは語るのである。それどころか、鼻の問題が南欧と北欧のコミュニケーションや個人化の様式の違いを生じさせる一因であることさえ示唆するのである――。

いずれにせよ、現代個人の存立・意味問題の議論にあつては、単にその社会的あるいは思想的な次元・側面だけではなく、感覚的な次元・側面も考慮する必要があるということを示した点でも、ジンメル「感覚論」は現代的な意義を失ってはいない。いやむしろ、ジンメルの関心が向けられたのがその生成期に過ぎなかった公共的社会空間が、十分な成熟をみぬままに、その基本的性格や構造そのものを、その直接的で感覚的な対面コミュニケーション様式の劇的な変化とともに変質させつつあるまさに現在こそ、ジンメルの「感覚論」は――その問題点や歴史的制約も含め――読み返されるべきであろう。